

今年二月、先住民族の文化を紹介するテレビジョン番組制作のため、インドネシアの洋上に生活する先住民族バジャウを訪問した。日本からはなかなか遠方で、まず飛行機に四回搭乗してスラウエシ島南の小島に到着する。そこで一泊して棧橋があるだけの港湾から旅客船を二回利用し、日本出発から丸二日間かけて南太平洋の小島に到達する。その沖合の洋上に生活するのがバジャウである。

洋上生活というと現在の日本では馴染みがないようであるが、かつて瀬戸内海には家船といわれる小舟で生活する人々が存在していたし、わずか数十年前までは東京湾岸に、水上学校、水上会館、水上警察が存在するほどの規模で人々が生活していた。世界に視野を拡大すると、現在でも、東南アジアには沿岸の洋上や大河の河口に生活する人々も多数存在しており、洋上生活は希有の存在というわけではない。

しかし、最大規模の洋上生活集団はバジャウであり、フィリピンのスールー諸島に約三〇万人、カリマントンの沿岸に約一二万人、インドネシアのスラウエシに約四〇万人が生活しており、合計で一〇〇万人程度と推定されている。本来は船上で生活し、シー・ジプシーという別名もあるように、自由に移動する漂流民族であったが、最近では政府の政策により、洋上に住居を構築して定住している人々が増加している。

今回訪問したのは小島の沖合約二〇〇坪の浅瀬に約三五〇世帯が集合した集落であるが、簡素な住居の一部は相互に棧橋で連結されているものの、大半は独立した家屋であり、移動は簡単に転覆しそうなカヌーを使用している。真水をはじめとする生活に必要な物資は対岸の小島の市場にカヌーで出掛け、魚類と物々交換で入手しているという生活である。きわめて不便だと想像するが、実際はそうではなさそうである。

なぜ海上に生活しているのかを住民に質問してみると、害虫が飛来してこない、家屋が隙間だらけであるから涼風が通過して快適であるということである。実際、我々は浜辺の小屋に滞在したが、蚊取り線香を使用しても手足は一晚でポコポコになるし、夜中でも寝苦しかったが、洋上の家屋で昼寝をしたところ、きわめて快適であった。しかし、バジャウの人々が海上生活を維持している、より重要な理由がある。

海上には土地所有の概念がないので、どこにでも勝手に住居を建設できる自由があり、周辺の住居と棧橋で連絡されていないので、他人が気候に訪問してこない。その結果、昼寝の時間も食事の時間も他人に気兼ねなくできる自由があるということである。そして現状では税金を支払っていないようで、行政に管理されない自由も重要である。すなわち自由な生活を謳歌出来るというのが、水上生活の最大の特権なのである。

この移動生活の利点を文明の視点から解説した学者がいる。アメリカの考古学者ブライアン・フェイガンは、人類は定住のために身近な災害の脅威を防御する努力をしてきたが、その結果、例外として発生する巨大な災害には脆弱になりつつづけているという趣旨のことを記述している。不幸なことであるが、巨大な堤防で防御した集落が全滅した東日本大震災の経験は、この意見が妥当であることを証明したことになる。

かつて地方から都会へ多数の人々が移動した背景は、地方の地域社会で過度に干渉される生活からの脱出という理由であった。しかし現在では、通信技術の進歩や監視カメラの浸透により都会の孤独は阻害されつつある。そこから脱却したいということで、最近では富裕階級がボートハウスやトレーラハウスを選択する傾向にある。このような視点からすると、バジャウの人々の生活は世界の先端なのかもしれない。